

教育相談的なアプローチによる自己効力感と 学習意欲の向上に関する研究

— 授業における教師の関わりの工夫を通して —

I 研究の概要

本研究は授業中の教師の関わりの工夫により、子供たちの「自己効力感」「学習意欲」を向上させるための教育相談的なアプローチを探っていく研究である。授業の中に教育相談的な関わりを積極的に取り入れることで、子供たちの自己効力感・学習意欲を高めることができるのではないかと考える。

そのためにはまず、教師と子供との信頼関係が基盤となる。授業の中で学習に対する自信ややる気、子供たちがもっている能力を最大限に引き出すために、どのように認め、励まし、子供たちの思いを受け止めていけば良いのかについて研究を深めた。一人一人の学習に取り組む気持ちが高まることが、「確かな学力」につながっていくのではないかと考えた。

II 成果と課題

今回の検証授業を通して、児童の自己効力感が有意に向上したことが確かめられた。その主な要因として三つのことが考えられる。

まず一つ目は、児童の姿や考え方、気持ちを受容しようとする教員の姿である。できないことを指摘するのではなく、過程に注目して、できたところまでを評価し、分からない気持ちと一緒に寄り添うような言葉かけ、間違えたときにもそれを受け止める姿勢が児童の安心感を生み、学習に対する自信を育てていくものだと考える。

二つ目は、対等感である。教員側が対等感をもつことで、自然と児童と同じ目線で考え、気持ちを理解しようとする意識が出てくるのではないかと考える。授業は教員が一方的に「教える」ものではなく、児童とともに作り上げていくというスタンスをもち、「ありがとう。」という言葉もたくさん投げかけていく必要がある。「自分はクラスの役に立っている。」という貢献感をもつことで、児童の自己効力感が高まっていくものであると考えられる。

三つ目は賞賛である。児童のふり返りカードを分析すると、「やる気が高まったとき」や「心に残ったこと」によく出てくるのが賞賛の言葉であった。「すごいね。」「上手だね。」「よく頑張ったね。」等、学習の成果や過程に対する賞賛が自己効力感を高めている要素の一つだと考えられる。褒められることが目的となり、褒められるための学習になってはならないが、自分のやり方や答えを肯定的に受け止めてもらえるということが、児童の自信になっていくものであると考える。

また、今後追究していきたいと考える3つの課題が残った。一つ目はヒントカードの活用方法である。「ヒントカードを使う自分はダメな自分」という認知を変え、「使っても大丈夫」と思えるような関わりをしていかなければならない。二つ目は誤答への対応である。誤答を受容し、さらにそれを全体での学びにつなげてもらえたという経験が、安心感をもたせ、貢献感さえももたせることが可能となってくるのではないだろうか。三つ目は、言葉かけの頻度である。教育相談的な関わりは児童との信頼関係を築くことは明らかになったが、その時間や機会をどのように作っていくのかが今後の課題となった。最後に、研鑽の機会を与えてくださった全ての方々に感謝し、研究報告とする。(大藤小学校 岩下和子)